福永武彦論〈暗黒意識〉以前
-『夜の三部作』を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 幸太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19101

文学研究論集第42号 '15・2
論文受付日　二〇一四年九月二十五日
大学院研究論集委員会承認日　二〇一四年十月三十日

福永武彦論〈暗黒意識〉以前
――『夜の三部作』を中心に――

Before the 'Dark Consciousness' of Takehiko Fukunaga: Foucusing on his "*yoru no Sanbusaku*"

博士前期課程一年　日本文学専攻　二〇一四年度入学
木　下　幸　太
KINOSHITA Kota

【論文要旨】

福永武彦が本格的に作家活動を始めようとする昭和三〇年前後の諸テクストを対象にして考察した。福永の仕事には絵画や愛についてのエッセイも多く、そのためか全集帯には「孤独と愛と死と藝術とを凝視しつづけた福永作品」と書かれる。

まず、本稿では全集帯文のように従来措定されている福永像が昭和三〇年前後のテクストから読み取れることを確認した。『夜の三部作』を「死」を主題にした物語という解釈から始め、「死」という主題には「愛」や「孤独」という主題が不可分に存在していると解釈した。その解釈からテクストを読むと「孤独」、「愛」、「死」という主題群の成す相互関係は各主題に通底する《暴力》というもう一つの主題を表象していると読める。個別の主題を並列させると、それらの共通項＝暴力が読み取れるのだ。結論として、福永は《暴力》が働く具体的な側面を提示するために「孤独」、「愛」、「死」を主題としたのではないかという考察に至った。

本論は、従来の読み方を忠実に突き詰めると、予想しなかった／求めなかった読みに行きつき、従来の読み方を更新させるという結果を示したものである。

【キーワード】　暗黒意識　愛の試み　結核　喪とメランコリー　暴力

1　『夜の三部作』以前

『夜の三部作』（昭和四四年一二月、講談社）とは福永武彦が昭和二九年から三〇年までの間に書いた中篇作品をまとめた作品である。それは「冥府」（昭和二九年四月、七月『文藝』）、「深淵」（昭和二九年一二月、『文藝』）、「夜の時間」（昭和三〇年五月、六月『文藝』、書き下しを含む）の三作品から『夜の三部作』は成る。

発表した年を見ると、福永は三作品を書き上げてから約十四年後に一つの本にまとめていることが分かる。『夜の時間』を刊行した際、その初版附記に「この作品は、昨年度に僕の書いた「冥府」及び「深

淵」と共に、「夜の三部作」と呼ばれるべき中篇のシリイズを形成するものである。それぞれに独立した物語だが、ただいずれも暗黒意識を主題にして、それを三つの違った面から取り扱っている点にのみ、共通点がある筈だ。[1]」とあることから、執筆時から三作品には通底する主題があるとされていたが、『夜の三部作』が発表されるまで、三作品が合わせて一冊の本に収められたことはなかった。[2]

先の引用で、福永は三作に〈暗黒意識〉という主題が通底していると述べる。これは福永がその後の作品で繰り返し書くことになる主題であるとされ、『夜の三部作』で初めてその名前を明記した形で小説内に登場する。また、福永は『夜の三部作』を刊行した序文に〈暗黒意識〉とは人間の悪意の喩えであると述べる。

> 人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの、私は作中人物の口を借りてそれを暗黒意識と呼んだが、そのような無意識それ自体を幻覚化して抽象的な形で書いてみたいと思った。（……）
>
> 〈『冥府』『深淵』という〉二つの中篇程度の作品のあとに、私は小型のロマンのようなものを書きたいと思い、そこにやはり人間の内部にうごめいている運命の悪意のようなものを、今度は正面から多視点で扱うことにした。「夜の時間」はその発想に於いて私の療養所時代の空想の産物である。そして暗黒意識という主題はここにも及んでいる筈だから、前の二作に引き続いてこれを書くことに、義務的な悦びをさえ感じていた。[3]（括弧内補足引用者）

福永は一九四七年（昭和二二年）から一九五三年（昭和二八年）の間、結核の療養のために清瀬の東京療養所に入所しているが、引用文を読むと暗黒意識という主題はその療養所に入所した期間の体験から得た発想であり、人間の悪意のようなものの喩えであると説明をする。また、『夜の三部作』刊行の四年後の昭和四八年、『夜の三部作』が全小説集に収められた際に「登場人物たちは次第に作者の精神の或る部分の拡大した図形を描くに至ったように見える。それは私が療養所にいた間に「物を思」ったその「物」が、絶望的に暗かったせいであろう[4]」と序文で述べている。

つまり、福永は執筆直前までの入所体験（福永は結核療養だけではなく離婚[5]なども入所中に経験した）をもとに発想した目に見えない悪意を、〈暗黒意識〉という象徴的な言葉を用いて『夜の三部作』に描き出そうとしたというのである。しかし、引用文を読んでも分かるように、福永の説明は暗黒意識の全体的、そして簡単な説明に終わり、〈暗黒意識〉という造語を用いてまで、なぜ書かなくてはいけなかったのかという問題意識や、また具体的にどのような意識が該当するかなどの内容は不明で、要領を得ない説明である。作者の説明は抽象的なもののみであり、いわば〈暗黒意識〉という言葉だけが先行し、その解釈は読者に委ねられている部分が大きい。

実際に福永自身の読み方の他に、先行研究には複数の読みがある。もっとも普及している〈暗黒意識〉の読まれ方を紹介すれば、柘植光彦の言及が代表的なものであろう。柘植は〈暗黒意識〉とは人間の意

識を読み解くべく精神分析的な方法を用いたものであり「福永武彦が〝死〟のイメージを言語化するさいの、最も重要な方法論」[6]であると述べた。絶えず結核という死の危険に曝され続けていた療養所での体験から得た発想であることを鑑みれば、死というネガティヴイメージの極北を表現したものであることは想像に難くない。先の柘植の言及を含め、先行研究の要点は以下の二つにまとめられる。

一　福永自身の結核療養とその直前までの戦争体験によって生じた死の強迫観念が、発想の土壌となっている。そして死の強迫観念から逃れるために〈暗黒意識〉を言語化する必要があった。[7]

二　〈暗黒意識〉は罪悪感を覚えることによって生じる。自分のみならず他者（死者を含める）の行いにでさえ有罪性を覚え、〈暗黒意識〉生成の一因となる。[8]

一の指摘が〈暗黒意識〉を書かなければならなかった事情、二の指摘が〈暗黒意識〉の具体的な内容を説明する一端になるであろう。加えて、福永の「療養所にいた間に「物を思」ったその「物」が、絶望的に暗かった」という言葉を踏まえれば、先行研究で指摘されているように暗黒意識は〈死〉など負の意識を表象したものであると言える。

しかし、〈死〉を恐怖し、逃れるという行為は〈生〉を求めるからこその行為ではないか。福永は約六年間の入所で死の恐怖や罪悪感を想っただけではなく、恢復して社会生活に戻りたいと願わなかったのだろうか。先行研究の一が指摘するように死を想うのは、死から逃れて生を希求するためだからである。〈暗黒意識〉は死や罪悪感などの負の意識のみでは生成されない。

つまり、〈暗黒意識〉は死を想う意識だけではなく、生を想う意識が両立することによって生成されるのである。生に向かうために、過去に生じた死や喪失を悲しみ、何があったのか認める意識が不可欠なのである。福永が入所中に、療養所内で刊行されていた『保健同人』へ寄せたエッセイによると、結核患者は自ら精神を支えなければ、精神の死（絶望）はいずれ肉体を滅ぼしてしまうと述べる。病という運命を凝視し、自らが受け入れざるを得ない孤独を理解した時、それは弱者の孤独ではなく英雄の孤独であると述べて、以下のように続ける。

> （精神の死から）逃れる道はない。忘れようとする努力は、かえって彼の心をむしばむに違いない。ただそれを自らに肯定すること、傷痕を嘗めて、未来の死を今日に於て生きること、それが唯一の方法であろう。運命の手に操られる傀儡として生きるのではなく、自らの運命を知る人間として生きて行く。[9]（括弧内補足引用者）

入所当時から、福永は死や病を見つめ、その運命と立ち向かって生きていくと考えるのであれば、入所時の思いから生まれた〈暗黒意識〉とは一概に「死のイメージ」とは言い難い。むしろ、福永の述べる「自らに肯定」をすること、そして「傷痕を嘗め」ること、言い換えれば現在の自己を認めることによって、現在に至るまでに喪失したものを

確認するという意識上の作業はフロイト精神分析の「喪の作業」のプロセスに相当するであろう。フロイトは『喪とメランコリー』で喪という行為は愛する対象（他者や理想など）を失ったことを嘆き、嘆くことによって失った事実を確認し、現実を見つめて新たな対象を求めようとする行為であると述べる。だが、喪の作業が適切に行われない場合、メランコリーが発生する。メランコリー（鬱病）とは「喪失が発生したのはたしかだと思えるのに、何が失われたのかが明確には認識できない」[10]状態である。つまり、愛する対象を喪失したという確認が不可能な状態、もしくは愛する対象が喪失したことにより何を自分は喪失したのか判断不能な状態である。「喪失した」と意識できず、語れないのである。メランコリーの状態では喪失を自我の外部で起きたことと判断できないために自我の内部で起きたことと判断する。つまり、喪失が起きて空虚になったのは自分自身であり、主体は自分自身を価値のない無力で道徳的に劣る存在で「愛の対象を喪失した責任が自分にあり、そのことを自分が望んだのであるという自責の形を必ず示し」て、最終的には自分自身の否定（死）に繋がっていくこととなる。

先行研究の一を踏まえ、〈暗黒意識〉が死の強迫観念から逃れるために言語化されたものと考えれば、福永は〈暗黒意識〉を言語化することによって「喪の作業」に必要な喪失の確認をしていたと解釈できる。言い換えれば、メランコリー状態から脱しようとする福永には何を喪失したのかを知る手段が必要であり、その手段こそ〈暗黒意識〉を描き出すことではないだろうか。

本稿では『夜の三部作』を中心に、療養所退所時期のテクストを検証する。福永自身が述べるように「絶望的に暗かった」[11]療養所時代の体験を土壌とした「死」の表象と従来解釈される〈暗黒意識〉をメランコリー状態から脱するための喪の作業であると捉え、そして喪の作業に内包される生を希求する側面を〈暗黒意識〉でも確認する。

2　〈暗黒意識〉の発生

まず実際に『夜の三部作』のテクストを辿り〈暗黒意識〉がどのように発生し、働くのかを確認する。発生過程は「冥府」と「夜の時間」冒頭から窺える。〈暗黒意識〉が小説内で初めて登場するのは「冥府」である。「冥府」には意識心理学を研究していたという大学教授が登場して暗黒意識について解説する。

> 例えば幻覚幻聴とか、déjà vu 即ちむかし一度見たことあるという感じだとか、時間体験、空間体験の異常だとか、意識溷濁に於ける夢幻的な風景だとか、離人症に於ける知覚の疎遠感、或いは実在感の喪失だとか、例はいくらでもありますが、これらは必ずしも精神異常者にのみ特有の症例ではない。多かれ少かれ、通常の人間にも、このような異常さを含んだ意識にならない意識、つまり暗黒意識というものが存在する。

今ここで見ているはず風景が、今ではない何時か、ここではない何処かでの風景とオーバーラップする。つまり今現在、初めて知覚した

はず音や風景が呼び水となり過去の記憶と重なるのである。ここで初めて知覚したはずの音や風景が、実は過去にも知覚したものであると認識する。この認識によって喪失していた過去を遡及的に確認するのである。

この他に、「夜の時間」冒頭でも忘れていた記憶の側面が述べられる。

人は誰でも過去を忘れて生きている。（……）人は過去を思い詰めたまま、この忙しい日常を生きて行くことは出来ない。（……）人はそうして無数の経験を積み重ね結局は一種の人生の匂いのようなもの、一種の味わいのようなものだけを意識の底に沈殿させて、細かいことは我と自ら忘れて行くのだ。（……）いつか或る瞬間に、失われたと思った過去の経験が、その時とはまた違った方向から、違った色彩を帯びて、ふと思い返されることがある。それが異常な重みをもって、現に生きていることの意識に干渉し、時間は今までのように未来に向かってのろのろと進行することを止めると、同時に過去にも遡って行き始める、もう終わっていた筈のことが、実際は少しも終っていないことが分る、人々は時間の夜の中で方向を見うしない、過去の事件の持っていた本当の意味をあらためて考えこむ

暗黒意識は意識に上がらない意識、つまり無意識であると言えるだろう。その無意識が突如意識に上ることによって暗黒意識は再生産・増強されてゆく様子を描いたのが「冥府」――作品内の世界との混同を避けるため作品名を指す場合は鉤括弧つきで表記する――である。題名の通り「冥府」は死後の世界の物語である。物語は「僕」が冥府を歩いている場面から始まるが、「僕」は気がついたら歩いており、冥府に来る前、つまり生前の記憶を忘却している。実際に過去を忘却している様子を見てみよう、「僕」は臨終の瞬間を思い出したものの、その他多くの過去を忘却した意識状態を夜と呼ぶ場面がある。

夜は疑問に充ちていた。（……）そして僕の思い出さないことは、その他にもまだまだ沢山あった。考えてみれば、この夜の中に僕がただ自分の歩いて行くか細い道をしか見分けないように、僕は僕が死んだという事実を、その死の前の暫くの時間を、思い出した、或いは見た、というにすぎなかった。その他のことはすべて暗い夜の意識の中に沈んでいた。（傍点引用者）

このように忘却した記憶を「暗い夜の意識の中に沈んで」いると喩えている。それは「僕」の意識が冥府の風景と照応する比喩であると同時に、「僕」の内部に記憶の明るみに出ない意識＝暗黒意識が生じていることも意味しており、冥府の空間的な暗さと「僕」の意識状態が「夜」という隠喩により接続される。

「冥府」の物語の中心は「僕」が忘却した生前の記憶を、少しずつ想起することである。先に引用した「夜の時間」の冒頭では忘却された記憶が想起されると「異常な重みをもって、現に生きていることの意識に干渉し、時間は今までのように未来に向かってのろのろと進行

することを止めると、同時に過去にも遡って行き始める」という。「冥府」でも同様に「僕」が想起を重ねるごとに、意識は記憶に干渉される。想起した記憶は、過去への悔恨や、惨めで孤独に充ちていた印象を意識に与える。そうすることで「僕」は次第に暗黒意識が生じる。つまり、忘却された記憶の想起はその記憶への悔恨や、過ぎ去ってしまったという喪失感をも同時に想起させ、その結果ネガティヴな意識を生じさせるのだ。メランコリーの原因であった語りえない喪失を理解することによって、暗黒意識は生じる。

暗黒意識を生じさせる作業には、生の希求があると述べた通り、「冥府」においても「暗黒意識を生じさせる作業＝過去を思い出す作業」は生を希求する手段として設定されている。冥府の人々は「新生」と呼ばれる、生まれ変わって生前の世界へ戻ることを求める。新生するためには自らの過去を十全に想起することが義務とされる。つまり、生を新たに受けるためには過去を想起して暗黒意識を増長させなければならない。想起されていく記憶は、その内容に関わらず「過ぎ去ってしまった」もしくは「取り返しのつかない」出来事として後悔や悲しみも同時に覚えてゆく。記憶を反復した数だけ、暗黒意識の増長による絶望――精神的な死――も反復されてゆく。

想起を反復することで「僕」の内部に絶望感が増してゆくが、想起される記憶は常に悲しい記憶というわけではない。例えば「僕」は生前にプラトニックな恋をしたことを想起する。その後、その相手は冥府の世界で一時期身を寄せていた「踊子」と呼ばれる女性であったことに気付く。

どうして気がつかなかったのだろう。そうなのだ、あの踊子、それがあの可愛い女の子なのだ。（……）ただその時、一緒にいた時、僕は彼女が誰であるのか、僕にとって彼女がどのような関りを持っているのか、思い出すことが出来なかった。しかし今、僕には分かった。一度だけ、一生に一度だけ、それも僕の幼い頃に、僕は心から人を愛したことがある。どんなに僕の一生が惨めで、下らなくて、無益だったとしても、あの幼い日に、僕は悔いることなく愛していたのだ、と。

想起を重ねる度に、自身の一生に対し暗い印象しか抱かなかった「僕」は愛した対象との記憶を想起したことで自らに希望を持ち、生前に愛した人と暮らすことを試みた。つまり、喪失した愛する対象をもう一度得ようと試みたのである。

しかし、「僕」が喪失した愛を再び得ようと試みた直後に踊子は新生の裁判にかけられる。踊子は新生の判決を下されて「僕」の前から消え去ってしまうが、新たな生を全うすれば踊子は再び冥府に帰ってくる、と「僕」は希望を持つ。生前に失った踊子との愛を冥府で取り戻そうとする試み、そして再び目の前から去った踊子がいつの日か冥府に帰ってくると希望を持つ。これらは一度喪失した愛する対象に対して、喪失した事実を認めない振る舞いである。しかし、フロイトの説に沿えば喪失を認めない限り、主体（「僕」）はメランコリーによって、自らの精神は蝕まれてしまう。

ここで冥府のもう一つの設定が活きてくる。冥府では想起と同様に忘却も義務付けられている。新生の判決を受けた者は冥府で思い出した過去の記憶を全て忘却して新生するのだ。つまり、幾ら待っても、もう二度と「踊子」と呼ばれた存在は戻らない。希望は失われたが「僕」はそれでも踊子と再び出会えるという希望を捨てない。

彼女が、あの同じ踊子として此所に現われて来る可能性は、殆ど無に等しいだろう。そして彼女はまた新生し、また死に、また新生し、また死に、……そしてそうした繰返しの末に、いつかは、また同じ踊子として、僕の前に現われて来ることがあるかもしれない。しかしそれは遠い先のことだ、それこそ殆ど永遠といっていいほどの遠い先のことだ。

僕はよろめき、そして歩き続けた。それは最早、希望というようなものではなかった。希望というにはあまりにもしらじらしい、微かに心の中で揺れているものだった。しかし希望が僅かでも香料のように残っているから、絶望は一層味が苦いのだ。それは恰も日没前の仄かなうすら明りが、その明るみに故に、夜よりも一層絶望的に感じられるのと同じようだった。

暗黒意識を乗り越えるための希望として、過去に喪失した愛を求め続ける限り、絶望といった暗黒意識は再生産されていく。先の「冥府の風景＝夜＝「僕」の記憶」という比喩に沿えば、明るみになった愛する対象への記憶が、忘却した記憶よりも絶望的に感じられるということである。

過去の記憶によって起こる絶望や悔恨、そしてそれから逃れようとする態度が〈暗黒意識〉を生む温床となる。

3　〈暗黒意識〉の作用

〈暗黒意識〉が生じるまでを「冥府」が描く一方で、「深淵」では〈暗黒意識〉の内容、どのように働くかを描く。「深淵」はある男女二人の独白が交互に書かれる形式の小説である。賄夫として療養所で働く男は、同じく療養所の事務員として働く女を、療養所に放火した後、強姦の末、軟禁する。軟禁された女は、彼の犯した行為は自身の存在がもとになっており、自身がただ存在するだけでも生じてしまう罪深さを感じ始める。次第に女は彼の暴力に餌食になることによって、生の実感を見出し、また孤独な彼の魂を救済しようと試みる。だが男は自分の持っている孤独に女が入り込もうとしているのを察知し、彼女を拒絶し絞殺する、という物語である。物語は両者の孤独を巡って展開するが、まず男は冒頭の独白で自らを、内部にうごめく「飢」によって動かされている存在であるとする。「飢える」という行為が、何物かを求める状態（今、欠如した状態）を示しているように、対象を求める「飢」という隠喩は、「孤独」を遡及的に意味している。

己は飢というものが己の中に生きている別の生きものであることを知っている。渇きというものを知っている。それは覚えたというのとはまるで別だ。それは己が生れた時から己の中に住んで

いたのだ。

この場合の「飢」とは空腹感のみを指すのではなく、満たされない欲望をも同時に指す。男の言う「飢」というのは食欲から他者、快楽などを求める対象の幅の広い言葉だと言って良い。それはこの男が後に「飢」の求めに従って、女を暴力によって所有、暴行したことからも考えられる。つまり、男は始終欲望に動かされてゆく存在である。

その後の独白をまとめると、男は飢饉の時分に生まれ、養えなかった母親に捨てられて旅の坊主に拾われたと言う。したがって両親の名前も故郷の名前も知らない。坊主が死んでからは天涯孤独である。これは空腹感を意味する「飢」の状況に、親類という最も身近な他者がいなくなった、孤独という「飢」の状況が相互に折り重なっていることを意味する。そして「昔のことを思い出すことが出来」ず「己にとってはいつもこの今しかない」と語るように、男はその設定上、執拗に「飢」や「孤独」といった何かを欲望する理由のみを語り、「過去」などと呼べるようなそれ以外の記憶が切り捨てられている。男が他に思い出せるのは私たちが文章として読める独白部分――二人の女性を殺し、ひたすら逃げ続ける記憶――しかない。

自身の過去の多くを喪失し、食や他者の欠如を埋めようとしたことや、殺人をした記憶のみを語る男は、喪失による孤独と悪意が前景化した暗黒意識の象徴的人物であるだろう。

たとえば作中で彼は「己は己で、お前は己ではない。」と考えている。自らの孤独は自身のみが所有し得るものであり、他者が入り込めはしないという考えが垣間見える。それゆえに男は、二人の女が愛を以って接近してきたことを自身の孤独への侵入と見做し、拒否して殺害してしまう。物語現在で男が女と出会う以前、つまり療養所で男が賄夫として働く以前にも、少女を殺害している。療養所に来る以前の男は監獄から脱獄し、その時にある村に隠れた。その村で出会った少女が一緒に逃げたいと言うと男にはある考えが浮かぶ。

もし一緒に逃げれば、己の自由はお前の顔や、微笑や、涙や、口説などに縛られるだろう。お前の魂は、たとえお前がそれを捨て去ったと言っても、なお己をおびやかすだろう。お前の女らしい心遣いは己の飢を甘やかすだろう。己は己だ。己は飢の命じるままに、遠くへ、遠くへ逃げて行けばよい。

少女を殺し、療養所に逃げた男は、そこで出会った女を誘拐し、強姦の後に殺害する。つまり男は〈女性に暴力を振るう〉という行為を本文の中から分かる限りで二度反復している。男が冒頭で「己にとってはいつもこの今しかない」と言いつつ、過去を回想する形式を取らざるを得ない一人称回想形式の独白を行うのは、今も昔も（そしておそらく未来も）同じ行為を反復しているからだ。この男には過去も現在も、そしておそらく未来も無く、あるのは反復され続ける暴力行為だけである。このように読むと、福永はこの男をあまりにも象徴的存在として書き表してしまい、人間の心理を探る立場からの読解を拒否しているように読める。この男は暴力行為の象徴であり、人間ではな

い。男という存在は自らの中に巣食う「飢」を表象する媒体に過ぎない。

「飢」という言葉の通り、男は自分を満たす「対象」を求めている。それは字義通り食べ物である場合もあれば、比喩的に他者、女性を求めている時もある。物語の始終を読めば、飢えている男は、やはり食べて捨てるかのように、他者を所有／道具化しようとする暴力を表し続けている。「深淵」は男を通して、暴力を表す。その暴力とは、まさに福永が『夜の三部作』序文で述べた「人間を内面から動かしている眼に見えない悪意」そのものである。「冥府」の男が後悔や絶望という形で自らを傷つける暗黒意識をもつとすれば、「深淵」の男は他者を傷つける暗黒意識である。どちらの暗黒意識にも共通していることは、人を傷つける暴力がその根底に働いているということだ。

4 〈暗黒意識〉の目的

『夜の三部作』において作中人物たちは自らの暗黒意識を乗り越えようと試みる。その試みとはすべて愛するという行為であった。ここまで確認した二作においては「冥府」の「僕」や「深淵」の女が愛を試みた。「愛する」という行為には対象が必要であり、愛の対象を新たに設定し直すことで生を希求するのである。しかし、『夜の三部作』の中でも愛の対象は様々である。暗黒意識が絶望という自らに向いた暴力である時と、悪意という他者に向いた場合があるように愛する対象は自らの場合もある。「冥府」では踊り子、「深淵」では男という他者を愛して暗黒意識を乗り越えようとする物語であるが、「夜の時間」は異なり、いわば自らを認め、自らの孤独を愛そうという物語としても読める。

つまり、福永は「夜の時間」で「愛する」という言葉を、従来言うような「他者に対しての行為」以外の意味で用い始める。それは他者と同時に「主体自身に対しての行為」という独自の考察を込めた特殊な用語として用いている。

おそらく福永は「夜の時間」を執筆した昭和三〇年ごろから「愛する」ということについて考察を深め、独自に概念化していったのだと考えられる。というのも、「夜の時間」執筆時期に、福永の愛に関する考えが言語化される機会があった。「夜の時間」が発表された一年後に『愛の試み』というエッセイ集を発表する[12]。このエッセイでは福永の恋愛論が展開されるのだが、その射程は広く一般的に想像される恋愛という行為だけに留まらず、個人の孤独についても語られている。

愛の行為、恋愛というものは孤独と背中合わせのものであるという意識が福永には前面化されている。たとえば『愛の試み』序文において「僕が愛という場合に、それは常に孤独と相対的なもの、人間の根源的なものである[13]」と確認することからも分かる。愛を語るエッセイにも関わらず初めに語られる章題が「孤独」であることにも注意したい。福永はまず孤独というものは人間が遍く所有しているものだという。

福永は絶望感を帯びた孤独を乗り越えるには、その孤独を積極的なものにしようと試みることが必要だと示唆する。

僕等は親しくした人間の突然の死を聞く。或いは恋人が自分から離れて行ったことを確実に知る。そういう時、外界は僕等と無関係になり、思いは屈し、僕等は無気力に、怠惰になり、時間はそこで途絶える。僕等は悲劇的な感情を味わい、それに満足し、自分の心が鎖されるままにしてそれを孤独だと呼ぶ。それは消極的な、非活動的な、萎縮した孤独である。詩や小説の題材としての孤独は、それで足りる。（……）しかし自分自身の経験として或る悲劇に直面した場合に、人は自分自身の力でしかそれの傷を癒すことは出来ない。（……）大きな心には大きな智慧が、小さな心には小さな智慧が、それぞれ浮び、どのような愚かな心にも、自分の悲劇を乗り越えて進む力のようなものが湧いて来るだろう。それが藝術に表された孤独とは違った人生の智慧という意味での、より積極的な、強靱な、孤独である。[14]

福永武彦という個人に限れば、孤独と愛することは不可分なものだ。また確認したように暗黒意識とは福永が結核に侵され療養所にいた時期に考えたものである。同じく療養所にいた時期に書かれたエッセイに入所中の自らの心境を書いた「病者の心」というものがあり、そこでは結核患者の抱く不安を語る。手術を受けても、病状は一進一退で死の強迫観念から、不安と恐怖が意識に上る。その時、患者の治りたいという意志を支えるのは愛であると述べる。

ただこの陰鬱な孤独から逃れ、死の妄想から逃れ、自己の存在を確認するためなら。或る者は宗教へと走るだろう。が、真に自己をたのみ、自己の責任は自己しか持ち得ないことを知る者は、神へは行かない。或る者は、また、愛にすがるだろう。人を愛することによって自らを隣人とつなぎ合い、人類の一員としての自覚に目覚めようと恩うだろう。愛は一つの行動である。しかし療養が長びく時、愛する者が彼のもとを去って行くこともある。彼の愛が酬いられないこともある。また、たとえ彼の愛に愛をもって迎えてくれる者があっても、彼が孤独であることに変りはない。[15]

ここに後のエッセイ『愛の試み』で書かれることになる、愛するという行為の考えがすでに読めるといっては言いすぎであろうか。たとえば「病者の心」で述べられた「愛をもって迎えてくれる者があっても、彼が孤独であることに変りはない」という主張は四年後『愛の試み』の中で幾度となく反復され説明される主張である。

愛は要するに繰返しであり、その繰返しに於て少しずつ愛の自覚が加えられて行くならば、それで満足しなければならないだろう。これに反して孤独は彼自身のものであり、初めもなく終りもなく、また繰返しもない。（……）愛は多くの場合、一種の幻覚であるが、孤独は紛れもない人間の現実であり、愛は成功すると失敗するとに拘らず、この孤独を靱くするものだと言いたいのだ。（……）孤独はエゴの持つ闘いの武器であり、愛もまた一種の闘い、相手の孤独を所有する試みなのである。（……）愛が失

敗に終わっても、失われた愛を歎く前に、まず孤独を充実させて、傷は傷として自己の力で癒やそうとする、そうした力強い意志に貫かれてこそ、人間が運命を切り抜けて行くことも可能なのだ。従って愛を試みるということは、運命によって彼の孤独が試みられていることに対する、人間の反抗に他ならないだろう。(16)

福永にとって悲劇的な出来事によって負った傷を癒やし、孤独を強くするものが愛であり、孤独を強くする試みが愛の試みなのである。暗黒意識が「人間の内部にうごめいている運命の悪意のようなもの」であるならば、愛の試みは運命の悪意に対する人間の反抗として対応するものである。療養所に入所中、福永は当時の不安や恐怖、孤独から死のイメージである暗黒意識という概念を作り出した。それは先行研究のいうところの生の希求を含んだものである。それゆえ、暗黒意識を想定し、乗り越えるべき対象を具現化する際には、同時に乗り越える方法論も想定していた。つまり喪失を乗り越えるために愛する対象を想定していたのだ。愛とは生であり、愛を試みることは生を試みることである。その試みは先の二つのエッセイにも書かれているように、孤独や喪失といった暗黒意識を解消することはない。むしろ愛は暗黒意識に飲み込まれずに自らを生かすものなのである。二者は両立して意識に存在する。

このような〈暗黒意識〉と〈愛の試み〉が不可分であるという仮説は「夜の時間」においても立てられる。『夜の三部作』の先の二作と比べて「夜の時間」は暗黒意識を描きつつも、そこにはハッピーエンドをも内包した物語であるということが特徴的である。物語の最後に登場人物たちは愛を試み、各々の孤独や絶望といったネガティヴな意識を乗り越えようとし、見事にその試みは成功する。さらに特徴的なことは、その愛の試みは他方で暗黒意識の再生産にも繋がることを予感させて終わる。これは〈暗黒意識〉と〈愛の試み〉が不可分であり片方が独立して存在することはないと示す。

「夜の時間」は佐伯彰一が述べるように「ひとりの男とふたりの女と、そして死者との物語」(17)といった構図を示す。計三人の人物が、死者が象徴する過去の出来事に翻弄される物語である。清水孝純が「明らかに『心』の福永版なのだ」(18)というように、構図だけならば漱石の『こころ』と似ているとも読めるが、「夜の時間」において死者の立場にいる奥村次郎は『こころ』のKとは異なり、意識的に悪意をもって行動している点や、『こころ』の先生が過去によって死を選ぶ結末が用意されているのに対し「夜の時間」は過去に囚われずに今を生きようとする人物たちが描かれている点からみても、両者は似て非なるものであろう。

「夜の時間」はまず、不破雅之と及川文枝二人が囚われていた過去を乗り越えて愛し合おうとし始める物語が読み取れる。乗り越えられる過去とは、物語現在を基準にして四年前に起きた共通の知人の自殺である。医学部に通う、いわゆるインテリ大学生である奥村次郎は自らが神であり運命であるという思想に則り計画的な自殺を試みるのだが、自殺直前に文枝の身体を暴力によって奪った。この事件がそれまで慕いあっていた不破と文枝の仲を引き裂き、物語現在まで不破と文

枝との疎遠状態に影響し続ける出来事となってしまう。というのも、不破は自殺の知らせを聞いた文枝が嘆く姿を見て、彼女は奥村を愛していたのだと誤解するのだ。実際のところ文枝は奥村に身体を奪われたことを恨みながらも、彼が直後に自殺したということに自責の念を感じていた。だが、不破は奥村が文枝を強姦した事実を知らなかった。その事実を知らずに、奥村の自殺の知らせに文枝が涙するという現実だけが彼の意識に焼き付いていた。

友人と愛の喪失として、奥村の自殺は不破の意識に記憶された。また、文枝にとっては失恋と共に愛してもいない相手に身体と精神を傷つけられたという喪失の記憶／奪われたという記憶として残った。この誤解と喪失の過去が二人にとって忘れられない暗黒意識の源泉である。

先に述べたハッピーエンドとは不破と文枝が過去の誤解を解消して新たな愛を試みるという結末である。喪失の記憶を乗り越え、改めて二人で愛を試みようとする場面は、『愛の試み』や「病者の心」の主張を反復している。

僕等は奥村のように、自分を神だと考えることは出来ない。僕等は人間であって神ではない。人間である以上、この運命に耐えるほかないじゃありませんか。

——でも耐えられなかったとしたら、文枝は弱々しく呟いた。

——だからこそ愛が必要なのだと考えることは出来ませんか。

（……）あいつの自殺は全く悪夢のようでした。それを思い出す限り、僕等はいつまでもこの夢に追い廻されて、夜の明けることのない暗闇の中にいるんです。僕等はこの夢から覚めなければならない。生きるということは、現在の時間を生きることにあるので、過去なんかくそくらえです。

「夜の時間」の読後感の良さは、他の二作と比べて良いものであろう。それは何よりも愛を試みようとする直前の引用のような行為が、「冥府」や「深淵」とは異なり成功するからだ。だが、「夜の時間」には不破と文枝の物語とは別に並列して展開する物語がある。「夜の時間」の物語現在において不破は冴子という婚約者がいた。文枝は冴子の友人として、不破は肺病を病んでいた冴子の主治医として物語現在を生きていた。偶然にも冴子は不破と文枝を再会させ、過去の出来事に新たな展開を与える存在として書かれる。たとえば、奥村が自殺する直前、文枝を強姦していたことを不破に教えたのは冴子である。冴子の存在によって不破と文枝が新たな愛を試みるまでになったが、不破は冴子との婚約を破棄しなければならなくなる。他人への何気ない親切によって自身の運命が変わるのである。自分は身を引き、共通の友人たちが愛を育むという、冴子にとっては苛酷な仕打ちを甘受しなければならない。冴子の振る舞いは、まさに暗黒意識という「運命の悪意」を体現したものとなる。

奥村によって、不破と文枝は友人と愛する対象を喪失し孤独や絶望といった暗黒意識の生じることとなった。皮肉にも暗黒意識を乗り越えようとする二人の愛の試みは、他方で冴子の友人と愛する対象を失

う行為――暗黒意識へと繋がってゆく行為――にもなってしまう。つまり、〈暗黒意識〉を乗り越える〈愛の試み〉は新たな〈暗黒意識〉を再生産させてしまうのだ。

「夜の時間」の特徴的な点はもう一点ある。奥村は文枝を強姦する直前に、彼女への愛はないと断った後、以下のように続けて述べる。

僕は誰をも愛していないし、誰からも愛されていない。そういう状況に於て、もし愛というものがあるとすれば、それは必然的に暴力の愛という形になる。平等な愛が二人の間にあるのではなく、行為者と犠牲者との間に暴力の愛があるだけだ。

愛というロマンティックな言葉に暴力性が含まれている可能性を示唆し、まさにその可能性を奥村は直後に体現する。「深淵」の男と同じく他者を道具化しようとする暴力が働いている点で、奥村もまた暗黒意識という負の象徴のように描かれる。だが、「深淵」の男と異なる点は、その暴力もまた愛であると考えている点だ。これは奥村に限らずとも愛する対象を自らに所有しようとするエゴとして、あらゆる形の物語の中に表れるものであろう。「夜の時間」に限って言えば、不破と文枝が愛を再び試みようとする際には、当然冴子との婚約の破棄や、冴子との愛を捨てる必要があると予想されただろう。実際に不破―文枝は自身の愛のために冴子を人身御供として、冴子の前から去った。〈暗黒意識〉が〈愛の試み〉を内包した意識であるのと同じく、〈愛の試み〉は〈暗黒意識〉を内包してしまう試みなのである。

冴子は不破との婚約が破棄され、いわば不破への愛の試みが失敗したことにより暗黒意識が内部に生じつつあることを感じ始めた。その一方で冴子は自分の孤独を見つめようとする。〈暗黒意識〉が生じ始めるということは、それに内包された〈愛の試み〉をも生じ始めることを意味する。その試みは不破―文枝と異なり、自らを愛する試みとなることを示唆して「夜の時間」は終わる。

死んでしまえばすべての不安から救われる、と冴子は考えた。あたし自身が消滅することで、あたしは誰からも無関係になれる。病気とか、愛とか、生きる希望とか、すべての煩わしいことから解き放たれて、自由になれる。（……）しかし生きなければ。（……）あたしはこういうふうに生きるのだろう。不安に耐え切れなくなり、今にも自殺してしまいそうな、か弱い、引きずられやすいあたしというものと、やっぱり生きたい、自分の世界をただその存在の故に大事にしたいと少しずつ虚無への欲望に打克って行くようなふうに、――勇ましく、元気に、希望に充ちて生きて行くというのではなく、不安に包まれ、吐く一息ごとに怯え、自分の孤独を悲しみ、しょっちゅう絶望しながら、それでも少しずつ、人間らしく、本当のあたしというものを生かすために、せめてこの孤独を靱くするために、――そういうふうに生きるだろう。

奥村の自殺は冴子という当該の出来事に直接関係の無い人にも暗黒

意識を生じさせる遠因となった。最初は奥村という暗黒意識の象徴的人物が不破と文枝の間で働き、そして終りには冴子の存在と行動という運命の悪意が三人の間で働いた。つまり、ある一組の愛が、他者の犠牲によって成り立つ結果となった。

しかし、冴子が絶望的な状況に追い込まれる結末にこそ「夜の時間」が、さらには『夜の三部作』が書かれた意味があるのだと考える。病という自身の力では抗うことのできないものに対して、また自分の行いによって恋人が目の前から去った現実に対して、冴子は身体も精神も自らの力で癒していかなければならない。そのため冴子は愛を失いながらも、自らの孤独を直視し、生きようと決意した。暗黒意識を乗り越える方法の一つとして、不破―文枝のハッピーエンドを迎える童話のような愛の試みがあるとしたら、現実的なもう一つの方法が冴子の行き着いたような決意、自らの内部にある暗黒意識を直視し逃げずに生きていこうとする決意といった孤独への愛の試みがある。

誰かとの愛に依存するのではなく「失われた愛を歎く前に、まず孤独を充実させて、傷は傷として自己の力で癒やそうとする」[19]ことに運命に対する人間の反抗としての愛の試みの本来の意味があるのだとすれば、福永にとって愛の試みとは孤独を愛する試みに他ならない。

5　『夜の三部作』以後

福永が療養所内で構想した〈暗黒意識〉という死のイメージは、生を希求する〈愛の試み〉と不可分な概念である。なぜなら、生を求めるために、内部に切迫する語りえない死のイメージを極めて抽象的に言語化し乗り越えるという、自らの入所時の意識における戦略と符合するからだ。「冥府」と同時期から構想されていた[20]とされる『死の島』においても〈暗黒意識〉が描かれることを踏まえると、入所時の体験から、福永作品の主題、方法論が決まったと考えるべきであろう。退所直後のテクストから福永武彦という作家のスタイルがどのように決まったのか、それを考えるためにはまず〈暗黒意識〉を主題にした『夜の三部作』は避けられない。本稿で述べたように〈暗黒意識〉は愛やそれに伴う孤独というものと不可分の概念であるとするならば、従来の福永武彦作家・作品のイメージ――たとえば全集の帯の文章「孤独と愛と死と藝術とを凝視しつづけた福永作品」――は療養所を退所し『夜の三部作』を書いてゆく昭和二九年から、『愛の試み』を書くに至る昭和三一年の約二年間の仕事によって印象強いものになっただろう。しかし、当時のテクストを読めば、「孤独を所有する試み」が愛であるとされ、また本稿で述べたことだが、〈暗黒意識〉という死のイメージは愛を得ようとする試みとも不可分である。そして何より、〈暗黒意識〉においても、愛するという行為においても、自他それぞれを傷つける暴力を孕んだものであることに注意したい。福永作品の表面的な主題は確かに「孤独」、「愛」、「死」であるかもしれないが、『夜の三部作』を読めば、自らの「孤独」を侵す他者を拒絶し、自らの「愛」を通すために犠牲を他者に強いり、自らを叱責する罪悪感とそれの極限として「死」が描かれており、先の語群には暴力が先行して働いている。

福永武彦という作家は「孤独と愛と死と藝術とを凝視しつづけた」

と読まれるより以前に、人間の諸活動に付随してしまう暴力を細やかに見詰めつづけた作家として検証されるべきだろう。

注

（1）福永武彦・『福永武彦全集第三巻』・新潮社・一九八七年十月・四九四頁。

（2）「冥府」は第二短篇集『冥府』（昭和二九年八月、大日本雄弁会講談社）に、「深淵」は『冥府・深淵』（昭和三一年、大日本雄弁会講談社）に収められる。両者は『冥府・深淵』でまとめられることはあったが、「夜の時間」は河出書房から新書版で刊行されたのみで、先の二作品と共に纏められるのは、それらが『夜の三部作』として刊行される昭和四四年が初めてである。

（3）福永武彦・『福永武彦全集第三巻』・新潮社・一九八七年十月・四九五―四九六頁。

（4）福永武彦・『福永武彦全小説集第三巻』・新潮社・一九七四年十月・五頁。

（5）源高根・「編年体・評伝福永武彦」・『國文學　解釈と教材の研究』第二五巻九号・至文堂・一九八〇年七月。源の評伝によると昭和二五年一二月に妻澄子と協議離婚している。

（6）柘植光彦・「主要モチーフからみた福永武彦」・『国文学　解釈と鑑賞』第三九巻二号・至文堂・一九七四年二月。

（7）柘植光彦（注6）。及び、清水徹・「福永武彦における《暗黒意識》」・『國文學　解釈と教材の研究』第一七巻一四号・學燈社・一九七二年十一月。

（8）長田弘・「福永武彦の文学」、福永武彦『夜の三部作』所収、講談社・一九七一年・四一二―四一三頁。及び、加賀乙彦・「暗黒と罪の意識『死の島』」・『国文学　解釈と鑑賞』第四二巻九号・至文堂・一九七七年七月。

（9）福永武彦・『福永武彦全集第十四巻』・新潮社・一九八六年十一月・一二六頁。初出は「病者の心」・『保健同人』一九五二年七月号。

（10）ここでは「悲哀とメランコリー」・『フロイト著作集　第六巻』・井村恒郎訳・人文書院・一九七〇年三月。及び「喪とメランコリー」・『人はなぜ戦争をするのか』・中山元　訳・光文社古典新訳文庫を参考にしてまとめた。なお鉤括弧内の引用は中山元の翻訳である。

（11）注4に同じ。

（12）『夜の時間』は雑誌『文藝』昭和三十年五・六月号に掲載され、書き下ろしを加え同年七月に河出書房から単行本が刊行される。『愛の試み』も雑誌『文藝』昭和三十一年一月号より六月号までの誌上に『新恋愛論』の名で掲載され、同年六月に河出書房から単行本が刊行される。

（13）福永武彦・『福永武彦全集第四巻』・新潮社・一九八七年七月・四九四頁。

（14）福永武彦・『福永武彦全集第四巻』・新潮社・一九八七年七月・三六八―三六九頁。

（15）福永武彦・『福永武彦全集第十四巻』・新潮社・一九八六年十一月・一二六頁。初出は「病者の心」・『保健同人』一九五二年七月号。

（16）福永武彦・『福永武彦全集第四巻』・新潮社・一九八七年七月・四八六頁。

（17）『日本文学研究資料叢書　大岡昇平・福永武彦集』・有精堂。初出は「日本図書新聞」九月号・一九五五年。

（18）清水孝純・「福永武彦、史的位置づけの試み」・『國文學　解釈と教材の研究』第二五巻九号・至文堂・一九八〇年七月。

（19）福永武彦・『福永武彦全集第四巻』・新潮社・一九八七年七月・四八六頁。

（20）福永武彦・「「冥府」初版ノオト」・『福永武彦全集第三巻』・新潮社・一九八七年十月・四九二頁。

※『夜の三部作』の本文引用は『福永武彦全集第三巻』（新潮社・一九八七年十月）に拠る。その他、同作品に関わる序文や附記も同文献に拠るが、これらはその都度注記した。